蒼の空とゴッホ

人間科学科２年　岡本　悠希

青を見る。緑を見る。区切られた空。
伸ばした手を窓の外に出した。
灰色の病室から右手が青色の空気に触れる。
何とかしてここから飛び出したくて
とりあえず山に向かって「青春のバカヤロー」
と叫んでみた。
途中で何人もの人が振り返ったからバカヤロー
の言葉尻は弱々しくて
それが自分のみじめさを一層強くした。

外に出たい。
―無理です。
叫びたい。
―恥ずかしいね。

何もできない気がして狂ったように大学の課題
を片付けた。
でも本当はただ自分が中途半端なのを知りたく
ないだけ。

一人の男が隣のベッドにやってきた。
「人生のバカヤロー」山に向って叫んでいた。
言葉尻は雄々しく強く伸びていた。
叫べばいい。外に出ればいい。
余命を宣告されていた彼は僕に言った。

たばこを1本もらって、駐車場を抜け、病院の
敷地外に出た。
借りてきたジッポで火をつけ一口ふかした。
とたんにむせたが笑いが止まらなかった。

外に出よう。「バカヤロー」と叫ぼう。
思い一つで鎖はほどける。